安心できる職場を、ともにつくろう

月刊 教職研修

The Kyoshoku Kenshu
May 2024
Vol.52-9
Whole Number 621

学校現場の挑戦に、勇気とアイデアを。

2024 5
2024年5月1日発行通巻第621号
（毎月1回1日発行）
1972年10月26日第3種郵便物認可

【巻頭インタビュー】

令和の学校をどう支えていくか

矢野和彦（文部科学省初等中等教育局長）

【特集1】

先生の心の不調を当たり前にしない

管理職とみんなでつくる「メンタルヘルス」にいい職場

【特集2】

授業改善の現在地

——学習指導要領の折り返し、次期改訂に向けて

編集顧問
市川昭午
若井彌一
天笠　茂
小川正人

写真de学校探訪

山形県長井市立長井南中学校
本校の創立記念日に実施している全校ボランティア「ラブリー長井」の写真です。
1993年に始まった全校ボランティア活動で、地域のためにとの思いから、
子ども会単位で地区長さんから要請された活動を実施しました。
集会所のペンキ塗りや、雪囲い準備、公民館の障子紙張替え、
公園整備、施設や神社仏閣の清掃など
午後のひとときを地域の方とともに活動しました。

教育開発研究所

Book Review

川地亜弥子（神戸大学准教授）

●学習とことばの関係を追究する

為末大・今井むつみ著
ことば、身体、学び
「できるようになる」とはどういうことか

新書判／232頁
扶桑社
1045円（税込）

本書の副題は、「『できるようになる』とはどういうことか」である。しかし、正確には、「よりよくできるようになる」ことを追究した書である。なぜなら、著者の両氏は、人間が「してみたい」「やってみよう」と思って動き出したことについては、何らかの方法ですでにできている、という前提に立っているように思われるからである。これは両氏の人間観や学習観と深く結びついている。その人がまずどのように「できる」存在であるのかをよく考え、指導者やコーチ、大人の働きかけを考えることを重視しているのだ。

もう一つの特徴は、ことばが、大人や指導者から一方的に与えられるのではなく、学ぶ人との関係のなかで生まれて、共有されることに注目している点である。「○○の改善には□□のことばかけが有効」といった、すでに知られたことば以上に、学ぶ人について、指導する人がどう理解し、どんな言葉が発され、学ぶ人にどう伝わったかに注目している。

私も学習者として似た経験があることを思い出した。大学生の頃、合気道サークルで稽古していた。芸や武における「道」の世界では、口伝等と呼ばれる、その世界の技を伝えることばがある。ある程度稽古を続けている人なら知っている公認のことばである。しかしそれ以外にも、稽古する者同士でいろんな「ローカル口伝」が生み出される。私の所属サークルには、「ビールを飲んで捨てる（ビールがたっぷり入った樽を両手で持ち、ぐっと飲んでぱっと樽を捨てるという意味）」という、公認になり得ないようなことばがあった。初心の頃、相手に腕をつかまれてうまく動き出せないときに、このことばどおりにやってみると、相手や相手につかまれている部分から意識が離れ、動きがスムーズになるのである。

このような「ここで生まれたことば」「この関係の中で伝わることば」に注目している点が本書の特徴である。ことばについて、まずは外から与えられ、それが使えるようになって初めてその文化、世界に参入していけるという位置づけではなく、人間がことばを生み出し、より熟達していく主人公として描かれている。

子ども同士の学びの場でも、こうしたことは生じている。鉄棒運動が苦手だった小学2年生が、ほかの子の「『のぼり坂』と『くだり坂』みたいな感じ」「前に行くときはがんばっている」「力をぬく」という助言のなかで、自分でできるようになり、「たかいところで、力をぬいて、ばんざいしてゆれたらできたから、うれしかったです」と書いたりする（奈良教育大学付属小学校編『みんなのねがいでつくる学校』44頁）。もちろん、こうした学びにおいても、指導者が果たす役割は大きい。

この書は、身体を通じた学習にことばがどのような影響・役割を果たしているのかについて記した書だが、教育・学習全般にかかわる問題を扱っている。為末氏の熟達論のなかでも、また、今井氏の動作を表すことばの研究のなかでも重要な「なぜ、描き切ることができない複雑な身体動作の勘所が、短いことばで伝わるのか」について、とことん深めた書である。一読を勧めたい。

Book Guide

編集部

友添秀則著
運動部活動から地域スポーツクラブ活動へ
新しいブカツのビジョンとミッション

A5判／338頁
大修館書店
定価2750円（税込）

学校運動部活動の段階的な地域移行が始まっている。しかしそれは緒に就いたばかり。進展する少子化や多忙をきわめる教師の働き方改革のためには、まだこれから大きな改革が待ち受けている。指導者、財源、組織間連携のあり方、それぞれの役割の整理などは、地域ごと競技ごとに、それぞれのステークホルダーが各地で具体的な議論と実践に移るべき時期にいるのだろう。編著者は国の検討会でも座長を複数務めており、日本の部活動改革について最もよく知る人の一人。各執筆者との幅広い議論を下敷きに、新しい時代の日本型スポーツ教育システムへの展望が、本書には描かれている。

住吉雅美著
ルールはそもそもなんのためにあるのか

新書判／176頁
筑摩書房
定価880円（税込）

お上の「要請」にすんなり従うのが正しいと思っている国民がいる。自ら「警察」のようにふるまう人々もいる。人の不祥事を告発することがエスカレートし、SNSリンチになる事態も止まらない。そうかと思えば、法律や規範を軽視したり、蔑ろにしたりする権力者や金持ちが、長年この国の中心に居座っていたことにも唖然とする。著者はこんなふうに本書を始めている。「こんな日本でルールをどう語ったら良いのか。政府や役所を信頼してもしょうがないから、庶民が各自の生活と命を守るための自生的なルールの可能性を考えてみよう」。ルールの原理を問い、武器に変える法哲学入門。

佐藤佐敏・中野博幸著
その情報は信頼できる？
批判的思考力を高めるエクササイズ

B5判／128頁
図書文化社
定価2420円（税込）

世の中にあふれるさまざまな情報を正しくとらえ、吟味することは大人でもむずかしい。積極的に情報端末を使いこなす小・中学生にも、対人関係や消費者トラブル等の話題だけでなく「情報の信憑性を評価する体験」が欠かせない。本書では、図表やグラフを含む文章を「この情報は本当に信頼できるか」と批判的に読み解くための観点を、「10個の読解方略」として整理している。たとえば、「テクスト発信者を検討する」や「データ作成者とテクスト発信者の関係を検討する」など。10分程度のすきま時間でも、見開き2頁で登場人物とともに「読解のエクササイズ」に親しめる。探究の時間にも。

今井伸・高橋幸子著
自分を生きるための〈性〉のこと
性と生殖に関する健康と権利（SRHR）編

A5判／120頁
少年写真新聞社
定価1870円（税込）

副題の「性と生殖に関する健康と権利（SRHR）」は、1994年の国際会議から提唱されている、世界中で取り組むべき人権課題。すべての人にかかわる課題だが、とくに思春期はからだも心も、自分自身を取り巻く環境も変化していく年代。自分のからだのことを自分で守り、決められるように10歳～15歳くらいの児童・生徒本人が正しく知識をつける必要がある。そして不安や困り事があればすぐに相談してほしい。そのためにも保護者や教職員にも知識の更新が必要だろう。本書は、からだの変化、月経、射精、性行動、妊娠と出産、性感染症といった内容の基礎を平易な言葉で説明している。

作成協力＝鈴井孝史